

1. 会報第50号の発刊によせて (会長 今井和男)

会員の皆様には、ますます、御清栄のこととお喜びを申し上げます。会報第50号の発刊にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

会報第1号は5年前2001年5月に発刊され、その間毎月発刊されました。この発刊に尽力されました西原会員をはじめ、編集委員の方々また各会員の皆様方の情熱に浄甚なる敬意を表します。

さて、会報内容を見ますと、○活動報告、○今後の行動予定、○ビオトープ関連、○会員の声、○来訪者の声、・・・を中心に発刊されました。なかでもビオトープ関連の記事のなかで、故吉富壮介さんの投稿は、特筆にあたいするものであり、また、最近では、美濃和会員の「ビオトープ周辺の植物」の投稿は大変勉強することが出来ました。

終りにあたり、この50号発刊を期に、さらに、益々充実した会報発刊を期待するものであります。

2. 活動報告 (事務局 記)

- 8月27日(土) 榎野川フォーラム発表会 発表者：西原会員、フォーラム責任者：関根会員、参加者：田村、美濃和、前田、岡村、原田マ会員
- 9月4日(日) 本日の活動に参加いただきました会員の皆様大変お疲れ様でした。本日新入会員の岡谷さんを含め19名で蕎麦の草取りと台風対策のどろ持ちをしました。台風の進路や大きさにもよりますが、やるべきことはやったので一安心です。水車の修理及び軸受けグリスアップもしました。
- 9月17日(土) 田んぼの稗取り、湿地帯植生調査準備、散策道の草刈りほか葎ふき屋根やカブトムシ小屋の修理を行ないました。17名の参加でした。
- 9月17日(土) 里山自然観察隊はキリギリスやコオロギなど秋の鳴く虫を中心に昆虫観察をしました。草の中に居る虫を声を頼りに探していました。隊員12名、保護者9名、指導員9名で行いました。

3. 今後の予定 (事務局 記)

◎ 見学者

- 11月26日 宇部健康福祉センター(厚東川、有帆川、厚狭川協議会)主催見学会
約50名程度の参加を募集中、案内役を会員2~3名程度お願いします。

◎ 行事

- 10月2日(第一日曜日)の活動 作業(草刈りほか)
- 10月15日(第三土曜日)の活動 午前：作業(稲刈りほか)
午後：里山自然観察隊
- 10月末頃 蕎麦刈り取り(追って日程は決まります)

4. ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝

ヒヨドリバナとサワヒヨドリ

ビオトープの湿地では、秋の花が咲き出しています。

秋の七草、フジバカマの仲間のヒヨドリバナとサワヒヨドリを今回は紹介します。

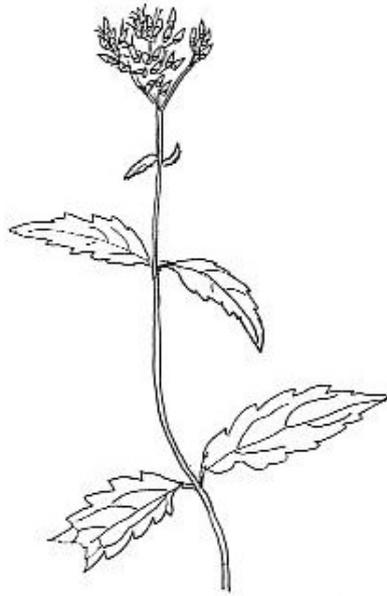
ヒヨドリバナは、白い小花をたくさんつけるキク科の植物です。秋の野山のいたるところに生育するごく普通の草花です。日当たりのよい道路沿いや草原、湿地まで、適応できる範囲は広範囲で、今ごろの季節はどこでも見ることができます。茎が盛んに分岐し、こんもりとしたかたちになるのが特徴で、次に紹介するサワヒヨドリに比べると、葉の幅が広いのがもう一つの特徴です。ヒヨドリが鳴く頃咲くので、この名があるといわれますが、これには異議があります。ヒヨドリが盛んに鳴くのはその繁殖期、4月から6月にかけてで、この季節にはあまり鳴きません。

思うに、この花の名前の由来は、ヒヨドリが渡りを始めるころに咲くことからきたのではないのでしょうか。ヒヨドリは、一般的には留鳥と呼ばれ、ひとつの場所を動かないで生活していると思われていますが、実際は違います。相当数のヒヨドリが、夏は北国へ、冬は南国へと移動しているのです。小野田の竜王山は、その渡りが見られる有数の場所です。10月に入ると、毎日、数百から多い時は数千羽のヒヨドリが海を渡って九州へと向かう光景を見ることができます。その時咲いているのがヒヨドリバナ。昔の人は、ヒヨドリが渡っていく光景と、この花が咲いている姿を重ね合わせて、この花にヒヨドリバナという名前をつけたのではないかと私は思います。

サワヒヨドリは、数は少ないながらもビオトープの湿地で今咲いています。ぱっと見てヒヨドリバナと違うのは花が濃いピンク色をしていることと、茎の色が赤紫色であること、葉の形も、ヒヨドリバナとは違って細長く、葉柄がないので茎に直接ついています。また、ヒヨドリバナのように分岐せずに、1本の茎を真っ直ぐ伸ばして、その先にまとまって花を付けます。

ところがこの2種は雑種を作るらしく、先日はサワヒヨドリのすぐ脇で、サワヒヨドリ的な要素が多分に入っているヒヨドリバナを見つけました。すなわち、花は白いけれど分岐せず、葉も細くて葉柄がほとんどない、というヒヨドリバナです。ビオトープの湿地には、昨年までは典型的ヒヨドリバナが数多く分布していましたが、今年はなぜか見られません。ヒヨドリバナにはよく斑入りの葉があるのが見られますが、あれはバイラス病というウイルス病です。昨年までのヒヨドリバナには斑入りの葉が多かったので、病気に負けて消えてしまったのでしょうか。

秋の七草として有名なフジバカマは、もともと奈良時代に薬草として中国から入ってきたものが帰化したと言われていています。現在は絶滅危惧種になってしまい、私も野生種が自生しているのを未だかつて見たことはありません。できるならば、日本古来の秋の七草として、このヒヨドリバナかサワヒヨドリをフジバカマに代わって昇格させてあげたい、と私はつねづね思っています。



ヒヨドリバナ (キク科)



サワヒヨドリ (キク科)

5. ビオトープ関連 (会員の声) (藤井義晴 記)

休耕田にビオトープ

休耕田にラグーン (自然酸化池)、予算少し。これが、私と二俣瀬との関わりのはじめ。

場所はどこにする? 田んぼをいじっても大丈夫? 穴 (池のこと) 掘ったら、もうお金なくなるんじゃない? 休耕田でなく、ほかじゃだめ?

次から次へと? (はてな)? (できるの)? (大丈夫なの)? (不安の山) でも、できちゃったんですよ。みんなの力ってすごいな!

場所も二俣瀬に決まり、平成12年8月いよいよ会員募集の開始。

9月28日いよいよ会の発足、38名の個人会員と、3つの団体が参加。

それからは、ほぼ2週間に1回、みんなでビオトープのイメージをつくり、1月21日いよいよ、制作開始。今度は、スコップ片手に毎週土曜日みんなで作業。形がどんどん出来ていくときは、えらいけど、楽しかった。

今は、いかに長く活動を継続していくか。草刈り、橋の補修.... e t c. 地味な活動に入っています。毎回参加出来ていなくて申し訳なく思っています。どういう参加の仕方をするかは、なかなか難しい問題ですね。自分のスタイルで参加していくのが一番だし、これが一番長続きするのではと勝手に思っています (すみません、言い訳です)。

ビオトープに関わって、もう5年以上たつんですね。そんなこともあって、ちょっと、始めの頃を回顧してみました。とりとめもなく、書いてしまいましたが、これからも、よろしく願います。

今回は 岡村智法 会員にリレーします。宜しく

6. 会報50号によせて

〇小雨煙る初秋のビオトープ (石井隆 記)

9月19日朝7時前、4ヶ月ぶりにビオトープを訪ねました。草原に入るとカエルやコオロギがびっくりし、足元から逃げて行きます。あちこちのクモの糸に水玉がたまっています。まるまると太ったジヨロウグモ、やせて細長いお父さんグモ、生れたばかりのあかちゃんグモもかわいい網を張っています。

8月20日に蒔いたというソバが一面に白い花を咲かせていました。近づいてみると茎の下部は赤く、上部に行くに従い土色から濃い緑、そして薄緑から限りなく白い緑色へと微妙に変化しています。その先端に真っ白い花がちりばめられています。ソバ畑を囲む土手はヒガンバナで赤く縁取られています。

ソバ畑上の棚田やビオトープの田んぼでは黄金色の稲穂がこうべをたれ始めています。ビオトープの谷戸を囲む森は青く黒く、静かに横たわっています。遙か2号線を越えて見える森はもやの中にかすんでいます。空は一面、白く灰色、ビオトープ全体を優しく蓋ってくれているようです。

ザザッと雨が降り出したのであずまやに避難しました。屋根の縁からポタポタと雨だれが落ちてき始めました。雨だれの音に負けじと、近くのコオロギの音が一段と高くなったような気がします。清流の奏でる水音は変わりません。

キチョウがあずまやに緊急避難してきました。ベンチの下で一休みした後何故か自分はいている長靴の先に留まり、ジットしています。自然の豊かさの中に浸り、とても幸せな気分です。

今から5年前の9月28日、ビオトープを作る会の初会合が開かれました。あれから5年、ビオトープは予定以上に自然の豊かさが増し、美しい景観をかもし出してくれています。会員皆さんの強い思いと日々の努力、自然・生命の力強さの賜物だと思います。

○会報50号おめでとうございます。(インターネット ホームページ管理者 若林正治 記)

いつも、ホームページに原稿を載せる関係で、多くの会員の皆様より一足お先に、会報を見ることが出来、大変楽しみにしています。(会の皆様すみません)

中でも、心に残っているのは、吉富壮介さんの書かれていた、珍説フタマタセです。(会報では第4号～24号になります) 先日、子供(6年生)が、夏休みの自由研究の題材にし、二人でその場所数箇所を周って見ました。その時、ここ二俣瀬の素晴らしさや里山の大切さを感じ、「里山ビオトープ二俣瀬」のメンバーに加わった時の事を思い出しました。

これからも、会報を、楽しみにしています。

○ (前田 歳朗 記)

今月は、“ビオトープ二俣瀬を作る会”が発足して5年、また会報も50号の発行と、節目の月となります。当初、行政の後押しでスタートした当会も、順風満帆とは言えないまでも、会員の努力によって着実に進化しています。季節ごとに変化するビオトープを眺めていると、5年前、初めて市民センターに集合した時のことを思い出します。

会員の皆様は、どのような抱負を抱いて入会されたのでしょうか。私は、仕事上(建設コンサル勤務)水環境に興味を持っておりましたので、自身の勉強を兼ねて、何かの役に立てばと思い、参加いたしました。しかし会合の過程で、この会の主旨が里山主体ということが解り、戸惑ったものです。私は、里山という言葉をもっと具体的に聞くのは始めてであったし、しかも生態を含めて、動植物に対する知識は皆無ですから。

私の会における活動は、参集日に参加するのがやっとという状態です。いまだに、動植物の生態、里山に対する知識は、頭の中で進歩しておりません。日頃から少しずつ勉強をし、蓄えられた知識で、少しでも会の役に立てるようになればいいのですが、いまだにエンジンがかかりません。少し焦っています。

さて、会発足10周年、会報110号を迎えるであろう5年後には、ビオトープはどのように進化しているのでしょうか。今と同じ形態なのか、対岸を含め拡張しているのか、それとも荒地になっているのか。そして、会員数、会員の平均年齢は?とても興味があります。地域通貨も、厚東川流域全体で通用するようになっていけばいいのですが。会の未来は、会員一人一人の力にかかっています。私の目標は、少しでも会すなわちビオトープの役にたつよう、研鑽に努めることです。この点において、私自身の5年後にも非常に興味があります。

○エコアップと植生調査 (美濃和 信孝 記)

昨年度より、ビオトープのエコアップが会の方針として進められることになりました。エコアップとは、生態系の質や量を高めていく活動のことを言います。ビオトープが、公園のように人間にとっての快適性を重視する場所や、農地のように作物の生産を第一義にしている場所とどこが違うのかというと、生物多様性、すなわち多種多様ないろいろな生物がすむことを目指している場所である、ということです。しかしながら、人工的なこと、つまり人の影響を排除して、自然のままに放置しておけば自然の質が良くなるかということ、そうはならない場合が多いのです。原生林のように、人間の影響がほとんどない状態で数千年という長い時間をかけてできあがった自然は別として、人里の自然は、人の手が継続的に加わることによってしか維持できない自然です。手を入れることを止めたとたん、たとえば休耕田がたった数年でセイタカアワダチソウに覆われてしまうのを見てもわかるように、生態系の質を高めていくためには、不断の人間の働きかけが必要です。このような自然への働きかけを称してエコアップと言います。

ところで、原生自然のように、長い時間をかけてできた自然は極相（きょくそう）といって、平衡状態に達した安定的な自然ですが、人里の自然は、動的で不確実性を帯びたものであることが特徴です。働きかけ次第では、何がどう変わるかわからないというふうにもいうことができます。例えば昨年は湿地で絶滅危惧植物が次々に出現しましたが、なぜ昨年急に発生したのかという原因を考えてみても、その答えは容易に見出せそうにありません。やはり自然には、人知を超えた部分があるとしかしいようがありません。

そういう自然というものが本来持っている不確実さ、先の予測が立たないという性質を前提にして、ビオトープの管理方法を考えなくてはなりません。それには、人のアクションとそれに対する自然のリアクションを正しくつかむことがまず必要です。こういうふうにしたいというイメージに沿って管理を実施し、その後、評価してその結果をフィードバックして、またさらにより良いものにしていくという循環のサイクル、これを「順応的管理」といいますが、これをしない限り、先が見えない自然を相手のエコアップは実現できません。

普通の公園の場合だったら、完成したあとその状態を維持していけばいいわけです。つまり、芝草を刈るとか木を剪定すればいいだけなのですが、ビオトープの場合は年々変わっていきます。どういうふうに変っていくかわからないので、自分たちで考えて一番いい管理の方法を取らなければいけないわけです。農作物、例えばコメづくりだったら、弥生時代以来の2000年の伝統があるわけですから、こういう時にはこうするという知恵はあるのですが、湿地の野生植物を相手にそんな知識が蓄えられているはずもなく、われわれ自身が、二俣瀬ビオトープという現場で一つ一つ試行錯誤していくしか方法はないのです。

これまで、少なくとも湿地の植生に関しては、思ったところ以上の結果が得られてきたと思います。しかし、これからは、こういう管理をしたらこうなった、という知識を集積して、今後の管理に役立てることが必要です。今回9月17日に行なった湿地の植生調査は、そういう意味合いがあります。湿地全体を対象にすると調査自体が困難ですし、管理というアクションと、その結果の植生の変化というリアクションの関係がぼやけるので、湿地の中で植生を代表すると思われる4ヵ所を選び、その中の植生を今回調査しました。各調査区は、2m×2mの方形柵（コドラートと言います）で、木杭を打ち、この4個所に生えている植物の種類と、どのくらいの面積をその植物が覆っているかという被度、ならびに最大高を測定しました。調査は毎年同時期に行なって、これらの植生の経年変化を追っていきます。コドラート内は手をつけないというのではなく、その場所は管理の記録と、植生の記録をきちんと残す、というふうにご理解ください。このような調査を何年か継続して行なうことにより、きっと見えてくるものがあると信じています。

7. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

今回はありませんでした。

8. 会よりの連絡事項

会報が50号を迎えましたが、今後もより良い会報となるよう皆様のご協力をお願いいたします。

9. 編集後記

二俣瀬ビオトープは、ぼつぼつ収穫の季節を迎える頃となりました。稲穂は、黄金色になって頭を垂れているし、蕎麦は花盛りで このまま順調に行って収穫の日を待つばかりです。

コドラートと言う初めて聞く方法で、植生調査も始まりました。もう、既に アサザなど5種類の絶滅危惧種も見つかっている事ですし、これからもまだ、何処かで眠っているかも知れない その仲間が何時 目覚めるか、とても興味を持たれます。知らない世界だった絶滅危惧種の存在から、又それが甦って来ると言う事まで、教えて貰えるのは、とても嬉しいです。

この会報も、この度 50号を迎えます。1号は、2001年5月23日。 第1号も充実しています。それから、気持は色褪せることなく 続き、むしろ益々 内容は濃くなっている様に感じます。これからも、ずっと 続くと信じています。

最近、この会報は ホームページから見ることになっていますが、その訪問者も先日 軽々3万人を超えました。会報は会報として、ホームページはホームページとして、その時の二俣瀬ビオトープの様子に興味の有る多くの人々に伝えています。担当者の方の、変わらぬご努力に 深く感謝いたします。

これからも、この会報と ホームページが沢山の方に読まれながら、そして二俣瀬ビオトープの作業を、楽しみながら 維持と発展して行く事を 願っています。

(大村 美智子 記)